幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

親の育児感情と乳幼児の感情認知との関連性について

分担研究者　　大　日　向　雅　美(恵泉女学園大学教授)

研究要旨　本研究は乳児の感情をその表情から把握する能力が父母間でどのような差異があるかを明らかにするとともに、親としての育児感情がそこにどのように影響を及ぼすかについて、併せて検討したものである。結果は、育児感情の一部に父母間の差異が認められたものの、類似性の方がより顕著であった。一方、乳児の感情認知に関しては、父母間の差異は明らかではなく、むしろ、父母ともに、育児に対する不安や苛立ちの感情が、乳児の感情認知の際に否定的な要素をもたらす傾向が示唆されている。

■ 研究目的

自己の感情を言葉で十分に伝達できない乳幼児に対しては、養育者がその表情から乳幼児の感情を的確に判断して対応する能力が求められる。通常は乳幼児の感情認知は母親に適性があると考えられているが、一方、父親の感情認知能力との間にどのような差異があるのだろうか。さらには、養育者側が抱えている育児ストレス等の要因は、乳幼児の感情認知にどのような影響を及ぼすのだろうか。

本研究は、育児能力に関する父母間の比較を行う研究の一環として、乳幼児の感情を把握する能力に焦点を当てて父母間の相違を検討すると共に、その背景要因の一つとして、養育者としての育児感情がどのように影響しているかを明らかにしようとしたものである。

■　研究方法

１．研究方法

乳幼児をもつ父母を対象に、乳幼児の感情認知検査と育児感情についての調査票調査の２種類を実施した。

１）乳幼児の感情認知検査

乳幼児の感情認知検査は「IFP 日本版（I FEEL Pictures）：以下JIFPと記す」を用い、調査対象１人に検査者一人がついて、次の要領で個別に実施した。

JIFPは30枚の12ヶ月児たちの表情の写真から構成されている。その写真を１枚ずつ提示し、次のA（自由回答）とB（評定）の２通りの回答を求めた。

A：「この写真の赤ちゃんがあらわしている、一番強くてはっきりしている感情・情緒はどんなものでしょうか。あなたの心に最初に浮かんだ言葉をそのまま、回答してください」

B：「それぞれの写真の赤ちゃんがあらわしている感情や情緒が、どれくらい快あるいは不快なものであるかについて、評定してください」（評定は「非常に不快」から「非常に快」までの５段階評定）

検査所用時間は一人あたり約 20 分であった。

２）育児感情についての調査票調査

育児感情を調べるための調査票調査は、首藤（1998）を参考に作成した。内容的には、親子間の共感経験を尋ねる 13 項目と、育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情を尋ねる 33 項目から構成されている。この調査票は JIFPS 検査の終了後に調査票を渡し、自宅で記入して１週間以内に返送してくれるよう依頼を行った。

２．調査対象

調査は神奈川県横浜市内に所在する保健所の乳児健診に来所した父母を対象とした。

調査対象有効数は次の通りである。

JIFPS：父親20名　母親51名

育児感情の調査票調査：父親 19 名　母親40名

■　研究結果

１．育児感情

親子間の共感経験の 13 項目に対する評定値の結果は表１に、育児に対する充実感や不安・苛立ちを尋ねる 33 項目に対する評定値の結果は表２に示す通りである。本調査は調

査対象数が現段階ではまだ少ないため、傾向を見るにとどめるが、表１、表２から以下の傾向が認められた。

まず、共感経験については、父母ともに「共有経験」を示す項目群の評定値が高く、「分離経験」を示す項目群の評定値が低い点で共通している。「共有経験」の中でも、項目７「子どもが悲しそうにしている時、なんとかしてあげたくなったことがある」、項目９「子どもの話や表情から子どもの身持ちを感じとろうとしたことがある」、項目12「子どもにプレゼントを買う時、子どもの喜んだ顔を想像しながら選んだことがある」、項目13「子どもが喜んでいる様子を見て、自分までうきうきしてきたことがある」の４項目の評定値は父母ともに高い。父母間で有意差が認められた項目は、上記の項目 13 と、項目６「子どもが病気の時、つらそうにしているのを見て、自分までつらい気持ちになったことがある」であり、両項目とも母親の方が父親に比べて有意に高いが、「共有経験」を示す他の項目では、父母間に有意差は認められていない。

一方、「分離経験」では、項目４「子どもの気持ちの変化についていけず、子どものことを不思議に感じたことがある」、項目10「子どもがこれはおもしろいと言葉やしぐさで伝えてきても、自分は興味を持てなかったことがある」の２項目で、母親よりも父親の方が評定値が高く、特に項目４で父母間の差は有意である。

次に、育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情については、表２に示す通り、「充実感」を示す項目に対する評定値が高く、「苛立ちや不安感」を示す項目への評定値が低い傾向にある点では、父母ともに共通している。父母間で有意差が認められた項目は、項目２２「子どもの中に、自分と似ているところを見つけると、うれしい」、項目２９「できることなら、子どものことは○○にまかせたいと思う」、項目32「子どもと何となく気が合わないと感じることがある」であり、いずれも父親の方が母親よりも有意に高い評定値を示している。

２．乳児の感情認知　快・不快の評定

写真１ 写真　30 の乳児の表情が示す快の程度に関する評定値の結果は、表３に示す通りである。30 枚の写真の中で、評定値に父母間で有意差が認められたものは、１枚（写真14）のみである。JIFP 実施マニュアルによると、写真14 に対する自由回答は、「ねむい」と「注意・疑問・驚き」（具体的には、観察している・関心・きょとん・疑惑・けげん・好奇心・真剣・夢中・じっと見ている・何だろう・熱中・びっくり・すごい）等の回答が多く寄せられる写真である。喜怒哀楽は正確に把握しづらい写真といえるが、この写真に限って父親の方が母親よりも「快」と判定する結果が得られている。しかし、他の 29 枚では、乳児の感情の「快・不快」の評定に父母間の差は認められない。

３．育児感情と乳児の感情認知との関連性

育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情と乳児の感情認知との関連性をみる。具体的には、育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情を尋ねる３３項目の因子分析から確認された２因子（「充実感」「不安・苛立ち」）の各因子得点を四分位点によって、high 群、low 群に分け、「充実感」の高い群と、「不安・苛立ち感」の高い群を抽出し、JIFP の自由回答結果を比較した。各群とも４名（高充実群：父親４名、母親４名／高不安・苛立ち群群：父親４名、母親４名）ずつであり、人数が少ないため、自由回答をそのまま記述して、傾向をみることとする（表４）。

表４が示す通り、高充実群も高不安・苛立ち群も、乳児の感情認知の回答に大きな差異は認められない。表中の（　）内のカテゴリーは、JIFP マニュアルに示されている各写真が示す乳児の感情として最もポピュラーな回答カテゴリーであるが、それと照合しても、両群ともポピュラー回答のカテゴリーとかなり一致している。

しかしながら、高不安・苛立ち群の回答には、乳児の感情を年齢的にかなり高く、ややもすると意図的な解釈を加えていると思われる回答も散見され、この点は高充実群にはみられない傾向である。すなわち、写真２「イライラ」、写真９「せつない」、写真12「ぶ然」、写真17「ぶ然」、写真22「ナルシストな感じ」、写真 23「冷めた感じ」、写真 26「大人を見下す」、写真28「むかつく」等である。こうした感情認知は、育児に対する不安や苛立ちの結果としてもたらされたものなのか、あるいは逆に乳児の表情をこのように認知することが、育児疲労感やストレスを高じさせるのかは、別途、検討が必要であろう。

■　考　察

育児感情、および乳児の表情から感情を把握する能力について、父母間の比較を行った結果、必ずしも明確な性差は認められなかった。一部の項目で、母親の方が子どもとの共有経験をより強く示す傾向が認められ、他方、父親では分離経験を示す傾向が得られている。しかし、他の大部分の項目では父母ともに同様の傾向が示されていて、有意差はない。同様に、育児における充実感あるいは苛立ちや不安を尋ねた項目でも、父母の回答は傾向として類似性が高い。しかしながら、「できることなら育児は妻に任せたい」「子どもと気が合わないと感じることもある」等、育児からの距離感を大きくする回答も父親に顕著にみられた点である。

このように、育児感情の面では、一部に父母間の差異が示されてはいたものの、乳児の感情認知では殆ど性差が認められていない。むしろ、育児に不安や苛立ちの強い場合、父母ともに、乳児の感情認知にやや意図的かつ否定的な要素が込められている傾向が認められた。本研究は、乳児の感情検査と育児感情との関連性を検討しようとしたパイロットスタディであり、今後は調査対象をさらに広く求めて、分析を深めていくことを課題としたい。

文　献

1) 首藤敏元「思いやりと正義感の発達を規定する家族要因の研究」平成10年度厚生科学研究報告書（第　1/6）131　143頁　1998年
2) 日本版　I Feel Pictures 実施マニュアル　1998年版